

令和4年3月5日

## 京口門だより No. 101

今年は寒いと言いながら、桃の節句の頃より少しずつ陽気の訪れを感じるようになってきました。奈良の東大寺のお水取りの行事が終わる14日ころまでは寒いといわれますが、この時期はまた花粉症も頭をもたげてきます。花粉症には抗アレルギー剤が定番のようですが、以前にもこの”たより”で触れましたように、漢方薬は意外に早く効果があります。花粉症にもいろいろとタイプがあるので、それに応じた漢方薬を選ぶ必要があります。

先日オミクロン株の新型コロナウイルスにかかった方が、療養施設に入所して経過をみている間に、漢方薬(当院の風邪11号)をのみ続けたら、悪化もせず経過良く退所できたと報告していただきました。これも前から申しておりますように、漢方薬が有効であるというデータがあちこちで報告されています。

花粉症でも新型コロナウイルスでも漢方薬を大いに利用していただきたいと思います。

ところで、少し歴史の話になりますが。中国で二千年ほど前に作られた漢方医学の原典といわれる「傷寒論」という書物があります。揚子江付近の長沙の長官であった張仲景という人が書いたと言われますが、中国古代からの医療の経験と知識をまとめたものではないかと言われています。

この書物の序文で張仲景の一族はもともと二百ほどいたが、当時の疫病すなわち傷寒によって三分の二を失ったと述べられています。この時代は後漢末の戦乱時代で、黄巾の乱や赤壁の戦いなどが有名ですが、戦乱により多くの民は困窮、疲弊して疫病も流行ったとみられます。張仲景はこの疫病を治すに先人の治療法や薬を多く集めてまとめ、傷寒論という治療書を著わしたと書かれています。今の新型コロナウイルスのような疫病、あるいはもっと激しい流行性伝染病にどう対処してゆくかを詳細に書き記した治療書といえます。疫病を軽症から重症まで分類し、それぞれ病気に応じた薬が書かれています。二千年ほど前の薬といえども、今日風邪薬として用いられる葛根湯や麻黄湯あるいは小柴胡湯などが書かれています。古い時代の薬だから現在には適応していないだろうと考えるのは間違いで、いつの時代にも用いることのできる漢方薬が出てくるのです。先ほどの風邪11号も「傷寒論」由来の薬です。

